

2015. 12. 8 (火)

愛と Love の意味と社会学

盛山和夫

本日は、私がお話をするということになりましたが、これは、今年度退職する教員に白羽の矢が立ったということのようです。引き受けた時はテーマのことは知らないで気楽に引き受けたのですが、後でこのテーマをお聞きして、これは大変な仕事を引き受けてしまったと、自分にとって一番不得手なテーマについてお話ししなければならないということ、いろいろ困りました。

「愛」という言葉は、日本語の話言葉としては、日常的にはあまり口には出さない言葉だと思います。たしかに文章では書きます。また、いろいろな歌謡曲やポップスの歌詞とか、その他さまざまな場面では出てくる大変ポピュラーな言葉ではありますが、日常用語で身近な人に向かって使っているかという、日本の場合は珍しいと言っていると思います。

もともと日本語の「愛」という言葉の語源には、諸説あるようですが、だいたいのところでは漢字の「愛」は、「振り返って気持ちにとどめる」というような意味だとのこと。つまり、心の中にじっと、重要なものとして振り返ってみるというような気持ちです。この漢字を使った日本語の言葉としては、他にも、愛し(かなし)とか、愛おしい(いとおしい)、可愛い(かわいい)、愛で

(めで)などがあります。どちらかという日本語の最近のはやりの「かわいい」という、日本文化の一つの特徴みたいなものを割とよく表している言葉かもしれません。

もちろん英語の“Love”と共通点もありますが、当然違いもあります。英語の“Love”という言葉を理解しようとする、私も難しいわけですが、まず真っ先に念頭に浮かんだのは、恥ずかしいようなことですが、若いときに見た有名な映画があります。今の若い学生の人はあまり見たことはないかもしれませんが、大変有名な「ラブストーリー」というアメリカ映画です。これは1970年—1971年という記述もあたりするのですが—、ちょうどまだベトナム戦争たけなわの頃のもので、大学紛争はようやく下火になりつつありました。その時期に、まさに、封が切られて全米でヒットし、しばらくして日本でも封が切られて日本でも大ヒットしました。

どのようなストーリーかといいますと、場所は、世界中誰でも知っているハーバード大学です。ハーバード大学の学生二人の恋物語なのですが、細かいところは省きます。一人は大金持ちのお坊ちゃん、一人は貧しい女性です。本当は女性のほうは、当時すでにハーバードは男女共学だったと思いますが、ハー

バードではなく、隣にラドクリフという女子校がありまして、(提携校としてほとんどハーバードと一体の大学でしたが) そのラドクリフ大学に通っていたジェファニーという女性です。バイトで図書館に勤務していて、オリバーという男の子と知り合いになって恋に落ちるというストーリーです。

これが悲恋物語だったのには、2つあって、1つは、オリバーのほうはお金持ちで、相手が大変貧しい女性だったものですから、オリバーのお父さんは大反対で、大反対されながらも貫き通して結婚します。それがまず1点です。次に、オリバーは大変成績優秀で、法律家になってニューヨークの法律事務所に勤めます。ところがニューヨークの生活が始まって間もなくして、新妻のジェファニーさんが白血病か何かで余命いくばくもないという状態になってしまいます。家族の反対を押し切って結婚したにもかかわらず、間もなく死んでしまうという、これが悲恋であるゆえんです。

さて、最終的に亡くなるのですが、葬儀の後ででしょうか、有名な言葉があります。それは、葬儀が終わってしばらくしてから、(葬儀の時ではなかったと思います、) まだ父親は反対でしたが、葬儀の後にその父親がオリバーに向かって“I'm sorry.”と言います。その“I'm sorry.”という言葉聞いて、オリバーは、“Love means not ever having to say you're sorry.”と言います。これは、その映画のメインテーマのような感じで、日本でも大きく話題になりました。この言葉は日本語では「愛とは決して後悔しないこと」というふうに訳されて、当時いろいろな場面でしょっちゅう出てきて話題になりました。これは、愛、Love という現象を象

徴的に、分かりやすくといいますが、われわれにも何となく意味が通じるような形で指し示した形で、多くの人に魅力的に映った言葉だったのだらうと思います。

ただ、やはり日本語と英語には違いがあります。今の英語をもう一回読みますと“Love means not ever having to say you're sorry.”

これを「愛とは決して後悔しないこと」と訳すと、厳密に言うとは、私は誤訳だと思うのです。というのは、オリバーが父親に向かって“you're sorry.”と言っているのだから、先ほど父親が“I'm sorry.”と言ったので、その“you”はオリバーの父親のことなのです。父親が“sorry”です。でも、それは「後悔しないこと」とはちょっと違うでしょう。日本語訳の「愛とは決して後悔しないこと」の「後悔する」というのは、多分オリバーのことを指すこととなります。

“I'm sorry.”と言っているのは父親です。ですからこれは、オリバーが父親に向かって、「“I'm sorry.”と言うべきことではありませんよ」と言っているのだと理解しなければなりません。

もともと“sorry”という言葉も難しい言葉なのです。実は私は若い時に外国で勉強していたものですから、まさにハーバードスクエアに映画館があって、そこで1975年ぐらいでしたでしょうか、封切りからだいぶたってからなのですが、その現場で映画を見たものですから、余計に印象に残っています。

そして、その“I'm sorry.”という言葉をどのようなときに使うかという、実は私がアメリカに初めて行った時に、よくあることですが、空港でbaggageが出てこなかったのです。「こんなことはあるのか」と途方

に暮れて、どうしようもなく、ぼうぜんとしていたのですが、一応手続きをしていると、アメリカの老婦人が私を見て、事情を聞いて、その時にその人から出た言葉が“I'm sorry.”でした。

つまり“I'm sorry.”というのは、日本語で言うと「お気の毒に」「あなた大変ですね」というような、同情するという感じの言葉です。相手の気持ちになって、強く言うと「痛ましいことですね」というような言葉だと思ふのです。よく、われわれは、“I'm sorry.”を「すみません」というふうに訳したりしますが、もう少し相手の気持ちになる、“sorry”という状態、相手の気持ちになっているときに発する言葉が多分“I'm sorry.”です。

元に戻ると、“I'm sorry.”とオリバーの父親が言った時に、オリバーが言おうとしたことは、「いや、愛というものはあなたから“sorry”と感じていただくようなものではありません」というようなことだろうと思ひます。そのように、やや反発をにじませながら話したことが非常に印象深く残っているわけです。その一方で、そのような愛あるいはLove というものはどのようなものかと、なかなか難しいと私は今でも思ひます。

日本語には愛という言葉と似たような言葉がいろいろあります。

例えば、これは中国語ですが「仁」です。論語によく出てきます。それから論語にもう一つよく出てくるものとして「恕（じょ）」というものがあり、許すというような意味があります。そのような言葉も、やはり訳語を見ると、他人に対する親愛の情とか優しさという意味で、愛というものと非常に近いと思ひます。古今東西を問わず、基本的には、愛

という言葉に近い言葉は本当は共通にたくさんあります。微妙な違いはありますが、共通であるのだというふうに考えていざらうと思ひます。

一方で、特に日本語の言葉遣いでは、家族とか友人とか恋人など、身近な他者に向けての愛というのが一般的だと思います。他方で、Love というのは一般的にはもっと広くて、もちろんキリスト教のほうでは人類に対する愛、隣人愛というものが基本ですから、これは身近な他者だけではなく、広く、世界に住む全ての人々、場合によっては動植物も含めて、そのような対象に注がれる気持ちというものが言い表されているのだらうというふうに思ひます。

そこで、そのような現象を社会学的に考えます。社会学というのは、一つの共同性という、連帯だとか、同朋だとか、結合だとか、統合だとか、そのような価値とか理念というものを考えたり、それがいかにして達成されるかということを考えていく学問だらうと、私は思っています。共同性という価値と、愛という価値とが、どのように関係しているのかということのを少し考えてみると、次のようなことがいえるかなと思ひ至りました。

まず、共同性というやや抽象的な専門的な言葉で考えたときに、よく考えると2種類の考え方があることに気がしました。一つは、公共財という形で、これは社会学だけではなく経済学でも使われるのですが、それはどちらかという、個人レベルで、個人の幸せをある種の方法で集計したもので、あるいは分布状態を抽象的に捉えたものです。集計したものであるいは分布状態をもとにして社会の望ましさを考えるというのは、それぞれの人々がどのような状態にいることが望ましい

かということ、やや上目線から、社会全体の状況を客観的な目線から捉えようとするときの考え方になっているように思います。

他方で、社会学ではそうではなく、よりミクロな個人間の関係性としての共同性というものを案外と重要視しているのではないかと、いうことに気付く必要があるだろうと思います。それはもちろん、個人と個人とか、個人と他者、個人が他者に向けて感じている、志向しているその気持ちとか、感情の持ち方、心の持ち方、それが共同性というもののもう一つの重要な要素です。つまり、人々の状態が客観的にどうであるかということだけではなく、人々の他者に対する心の持ち方がどうであるかということも、多分、共同性ということのもう一つの重要な要素であるというふうに思い至ります。ただ、それは、心とか気持ちに関わることなので、これは最初の日本語の「愛」における、心の中にとどめておくということと、やはり密接に関係してくるだろうと思うのです。

社会学ではいろいろな問題を探求するわけですが、その中には社会保障とか福祉などの現象があります。もともと、福祉や社会保障というもののある種の原型というのは、東西

を問わず宗教的な教えから来ているわけですが、キリスト教にはもちろん隣人愛というものがありますが、仏教では慈愛です。日本におけるある種の社会福祉的な作業というもののルーツをたどると、奈良時代の聖武天皇の時代の事柄がよく出てきたりします。そのように、もともと、慈愛とか隣人愛、それが社会保障とか福祉とかの根本にある。あるいは逆のネガティブな面としては、格差とか差別という共同性に対立するような現象と、いわば対立される形で、愛あるいは慈愛というものがある。そういうことに、あらためて気付かされるということが最近になって分かりました。

そのような点で、必ずしも全てを愛で尽くすというわけにはいきませんが、社会学的な問題意識や社会学的な研究の一つの柱の中に、愛とか人に対する思いやり、あるいは優しさ、慈しみというような感情がベースにあるのだということ、あらためて確認した次第です。大変大ざっぱな話ではありますが、これで私の話を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

(社会学部教授)